

散策記という文学ジャンル

永井荷風「日和下駄」と東京

真銅 正宏

追手門学院大学

明治維新により、江戸が東京になり、この都市の近代化が始まった。東京百年史編集委員会編『東京百年史』第二巻(ぎょうせい、1979年)によると、江戸時代の江戸の人口は、最盛期で130万人の人口を誇った。ただしこのうちの大部分が、旗本・御家人・諸大名とその家族および家臣団であり、それ以外の江戸町人の人口は、近世半ばの1721年頃で約50万人、幕末の1843年頃には約54万人で、あまり変化がない。大政奉還後、徳川家が駿府に移封となり、旧武家地から武家集団が居なくなると、その土地は荒廃したが、明治2年、すなわち1869年の調査によると、市中の人口は約50万人で、少し減少はしたが、やはりあまり変わらなかった。その後、荒廃した旧武家地に人口が再流入し、明治6年、すなわち1873年には、約88万人にまで回復した。しかしこの数は、まだ近世の最盛期から見れば、3分の2にも満たない。つまり東京は、近世から近代へという時代の流れとは別に、まず一旦衰微してから、時間をかけて再発展した都市であるという特徴を持つ。

江戸時代の繁栄の記憶は、当然、ここに住み続けた人々の脳裏には遺っていた。そのために、日本の近代化について語る言説においては、しばしば東京の近代化の動きを、否定的に捉える視線が見られる。いわゆる「昔はよかった」式の回想的文章である。特に、西洋化の象徴として、煉瓦造りの街並を目指した銀座について語る文章は、その否定的言説の最先鋒であろう。というのも、日本の湿気の多い気候と西洋の石の文化とはうまく合わないという、まことしやかな風評が、ある程度の説得力を持っていたためである。

しかしながら、これらが事実そのままではなかったということについては、藤森照信の『明治の東京計画』(岩波書店、1982年)に、丁寧に説明されている。湿気による黴などの被害の多くは、当初の煉瓦の質の悪さや、十分に乾いてから入居するというごく常識的な知識の不足からもたらされたものであった。このことに代表されるように、東京の市区改正という都市化の新

しい動きは、あらゆる方面から反対された。

ところで藤森は、明治の東京の都市計画の実態を明らかにする研究に携わるに際し、「江戸の方がよいと思わないこと、未来の目で東京を切り捨てないこと」に注意したという。藤森は次のように書く。

もう一つ奇妙に思えたのは、山の手に住み下町を語る人に出会ったことである。その言葉は、台所の隅や板塀の陰影から路次裏の人情まで仔細に写して余すところなく、下町の人が下町を語るよりずっと表現力にとんでいた。たいてい引き合いに出されるのは荷風で、麻布の西洋館に住んで夜な夜な玉の井あたりを徘徊する姿勢は、今も、散人の体毒を薄めつつも、文学者の都市観の根っこに生きているように思われた。

ここで登場してくるのが、山の手の人永井荷風である。荷風は、アメリカ合衆国とフランスへの5年弱の外遊を経て明治41年、すなわち1908年に帰国し、当時の日本の浅薄な西洋化に対して、痛烈な批評の言説を続けざまに発表した。要するに、東京の近代化への反対派の一翼を担うような存在として捉えられたのである。また、江戸文学にも実に親しかった。

しかしながら、彼の態度は、さほど短絡的なものではない。

後に詳しく述べるが、どうやら荷風は、浅薄な西洋化への反撥から、江戸時代を志向し、江戸に回帰したのではなく、荷風なりに、現実の東京を東京として、すなわち近代都市として見る視線を用意していたようなのである。ただ、その方向性は、当然ながら、都市計画を実現する政治家などとは、異なるものであった。彼にとっての東京という都市とは、住む場所である以上に、文学の場であった。

本稿は、そこに住むのではなく、視線を投げかける対象としての土地を、形成しようとした荷風の態度

を、散策記を通して検証しようとするものである。

1. 「日和下駄」の世界

荷風の東京観、またその風景観自体を知るに実に便利なものとして、『日和下駄』という散策記がある。最初、『日和下駄 一名 東京散策記』の総題で、荷風が編集に携わっていた『三田文学』の1914年8月から、1915年6月まで、3月と4月を除いて全9回にわたり連載された。その後、序文が加えられ、全体が「第一」から「第十一」までに再編成され、それぞれの章に表題が付されて、1915年11月に朧山書店から刊行された。

その「序」には、「此書板成りて世に出でん頃には篇中記する処の市内の風景にして既に変化して跡方もなきところ少からざらん事を思へばなり」と書かれ、刻々と移り変わりゆく東京の風景の中でこれが書かれたことが示されている。要するにこの書は、その一瞬の東京の姿を捉えた、記録写真のような書物なのである。

「第一 日和下駄」の章に、「その日――を送るに成りたけ世間へ顔を出さず金を使はず相手を要せず自分で勝手に呑気に暮らす方法をと色々考案した結果の一つが市中のぶら――歩きとなつたのである」と韜晦しながらも、散歩の目的を述べた次のような言葉が見える。

元来が此の如く目的のない私の散歩に、然しながら若し幾分でも目的らしい事があるとするならば、それは何といふ事なく蝙蝠傘に日和下駄を曳摺つて行く中、電車通の裏側なぞにたまへ残つてゐる市区改正以前の旧道に出たり、或は寺の多い山の手の横町の本立を仰ぎ、溝や堀割の上にかけてある名も知れぬ小橋に出逢ふ時など、何となく其のさびれ果てた周囲の光景が私の感情に調和して、少時我にもあらず立去りがたいやうな心持をさせる。さういふ馬鹿気な心持になるのが何よりも嬉しいからである。

これは、一見すると、「市区改正以前」への郷愁の言葉のようにも見えるが、事実はそう単純ではない。ここに対比されているのは、江戸時代の名所古蹟と明治の西洋風の新風景などではなく、新旧の別を超えた、

人の手によるいわゆる名所や古蹟、名建築などと、名もない風景との対比だからである。

例えば「第八 空地」に、よりわかりやすい例が提示されている。語り手である「私」が、久米君という友人(久米秀治であろう)から、「有馬の屋敷跡には名高い猫騒動の古塚が今だに残つてゐる」との話聞いて、共に訪ねる場面である。

名所古蹟は何処に限らず行つて見れば大抵こんなものかと思ふやうなつまらぬものである。唯其の処まで尋ね到る間の道筋や周囲の光景及びそれに附随する感情等によつて他日咄の種となすに足るべき興味が繋がれ得るのである。(略)私達は既に破壊されてしまつた有馬の旧苑に対して痛嘆するのではない。一度破壊された其跡がこゝに年を経て折角荒蕪の詩趣に蔽はれた空地になつてゐる処をば、更に何等かの新しい計画が近い中にこの森とこの雑草とを取払つてしまふであらう。私達はその事を予想して前以て深く嘆息したのである。

ここに書かれているのは、確かに、名所古蹟を尊ぶ文学的心情ではない。むしろ名所古蹟自体には当初からさほど期待していないかのようなのである。一方、そこに到る途中の何気ない道筋に見るべきものがある、という点はここでもしっかり書かれている。さらに、その良さもまた、いずれ失われ、新しい何らかの建物が建つことが幻視されている。そしてそこから遡行的にこの土地が見直され、もはやこの土地もすぐに無くなってしまうのだなあということから、その風景が語る以上の価値が見出されているのである。

こうして見てくると、例えば「第三 樹」に書かれた次の言葉も、同様の意味合いを持つものとも見えてくる。

もし今日の東京に果して都会美なるものが有り得るとすれば、私は其の第一要素をば樹木と水流に俟つものと断言する。山の手を蔽ふ老樹と、下町を流れる河とは東京市の有する最も尊い宝である。巴里の巴里たる面目は寺院宮殿画廊劇場等の建築あれば縦へ樹と水なくとも充分であらう。然るにわが東京に於てはもし鬱然たる樹木な

くんばかの荘麗なる芝山内の霊廟とても完全に
其の美と其の威儀とを保つ事は出来まい。

これは、一見すると、江戸期以来の、徳川家の霊屋である「芝山内の霊廟」と、「鬱然たる樹木」との総合芸術性への賛美に見えるが、おそらくその先には、パリならば、樹木や水が無くても建築物だけで可能であると考えられる都会美が、東京においては不可能であるということの揚言とも思えてくる。東京が近代化されるということは、あるいは、鬱然たる樹木や水が失われることかもしれない。もしそうならば、いずれは失われるこれら樹木や水流に、今は殊更に愛着を覚えるという、荷風独特の価値観が認められるのである。

そもそも、『日和下駄』の構成は、以下のようなものであった。

序

第一 日和下駄

第二 淫祠

第三 樹

第四 地図

第五 寺

第六 水 附 渡船

第七 露地

第八 空地

第九 崖

第十 坂

第十一 夕陽 附 富士眺望

上記のとおり、選択基準が何ともばらばらに見える。これらの要素は、近代化の要素から遠いことはいうまでもなく、また江戸に回帰すべく褒め称えられるべき名所古蹟でもないのである。一見、名所探訪と思える寺についてでさえ、よく読むと、通常の拝観などと目的も意味合いも異にした言葉が続く。ここでは、大寺の大伽藍より、名も知らないような小さな寺が尊ばれるのである。このことは、空地や崖、坂などを訪れることと寺の訪問とが同列になっていることから明らかであろう。繰り返しになるが、これは、名所探訪記などでは決してない。むしろそのような散策記の通念を壊すような行為なのである。「淫祠」が第二に選ばれていることが、何よりそれを象徴している。

例えば、同じ文学者で、東京生まれの幸田露伴に「一國の首都」(『新小説』1899年11月)という文章がある。この文章などは、明治30年代の道路や行政機能を中心とした東京改良の動き、すなわち市区改正の議論にとって、後押しとなる優等生のような文章である。そこには、東京への愛情が次のように充ち満ちている。

あゝ帝国の内、いづくにか敢て我が日本国の首都たる東京を愛せずして可なりといふべきの民あらんや。首都好くんば吾人幸にその慶に頼らんのみ。首都悪しくば即ち如何。曰く、我が物と思へば眼の眩めき耳の鳴り頭の裂けんとする身をも厭はぬ習ひなるものを、如何で一國の首都の悪くとも、悪き首都なり、悪き首都なりといひ罵るのみにて余所に捨て置くべき道理あらんや。悪きは悪きなり、善しとはいふべからず、されどこれを改めに何の憚るところかあらん。国民としてその國の首都を愛せざるは、人としておのれの頭を愛せざる如き烏譚の痴者とはいふべからずや。

この激しい口吻の裏には、当時の市区改正への反対意見に対するさらなる強い反撥があったようである。その舌鋒は、同じ文学者にも向けられた。同じ文章には次のような言葉が見える。

詩人及び小説家等は、やゝもすれば都府を罪惡の巢窟の如く見做し、村落を天国の実現の如く謳歌す。何事につけても観察力のみ鋭敏に過ぎて施為の能に乏しきを常とする詩人小説家等の、都会を好む能はずして村落を愛するに至るべきは勢ひ然るべき事ながら、悪しきものをば悪しゝとのみして抛ち捨てんは仁恕の道にあらず。いはんや吾人は強ち都会を悪しとのみすべき理由を有する事なきをや。吾人は決して一派の詩人小説家等に雷同して、無責任に都会を厭惡嫌忌しこれを嘲罵するのみに終るべからず。観察の力の鋭敏なる人よりはその観察の結果を藉りて、而して吾人が考量の資となし、吾人が執るべき改善の方法を定むべきのみ。

ここで露伴は、観察者ではなくいわば実行者の道を選んでい。しかしながらこれは、逆に云えば、文学か

ら遠ざかることの宣言でもある。露伴は都市の必要要素の一として、「神祠」を数えている。「神祠は我が都府内に存すること甚だ多く、大概皆形勝の地を占め、相応の面積を領す。淫祠にあらざるより以上は、国家の尊崇し玉ふところにかゝるを以てその何の神たるに論なく褻嫚^{せつまん}すべからざるはいふまでもなし」と書いている。この、何気なく淫祠を切り捨てる態度に、荷風の「淫祠」に対する視線との相違は明らかであろう。

2. 荷風の見る東京の建築物

もちろん、日本の風景において、指標的な役割を果たす建築物としては、まず神社仏閣が挙げられよう。東京もその例外ではない。

天皇に「大政」が「奉還」され、王政復古となった明治維新の際には、「神」の位置が上がった。結果、神仏は明確に区別され、廃仏毀釈の名で寺院が排斥されるということとなった。このこともあり、蔑視された寺院は、殊更に荷風の興味を強くひくこととなった。これは、露伴が「一国の首都」の中で特に神社を重視したことと対照的である。そこには、失われゆくもの、消えゆくものへの荷風独自の視線、すなわち、失われゆくからこそ重要であるという皮肉な二重の視線が投げかけられるのである。

『日和下駄』の「第五 寺」には、次のように書かれている。

上野寛永寺の楼閣と芝増上寺の本堂は焼けてしまひ、谷中の天王寺は僅に五重塔を残すばかり、本所の羅漢寺も既に廃滅して五百の羅漢も一ツ残らずちりへに紛失つてしまつた今日、最早や東京には浅草観音堂位の外實際目につくべき寺院はない。(略)私は唯通りがりに、例へば古びた貧しい小家のつゞいた横町の端なぞに偶然半ば崩れかゝつた寺の門を見付けてあゝこんな処にこんなお寺があつたのかと思ひながら、そつと其の門口から境内を窺ひ、青々とした苔の色や古池に茂つた水草の花なぞを見るのが、何と云ふ事なく嬉しいと云ふのに過ぎない。京都や鎌倉の名高い寺々を見物するのは異つて、東京市中に散在したつまらない寺にはまた其れだけの別種の興味がある。これは単独に寺の建築や其の歴史

から感ずる興味ではなく、云はゞ小説の叙景、若しくは芝居の道具立を見るやうな興味と云つて置かう。

このような視線こそは、荷風が願うところであり、これは、東京の街を西洋風に発展させようとする行為でないばかりか、江戸時代のような立派な寺院の堂宇を再興しようとするようなものでもなかった。そこには、それらを否定してまで、詩趣、すなわち文学的感興が求められていたのである。

確かに次のような発言もある。同じ「第五 寺」の章の文章である。

近来日本人は土木の工を起す毎に欧米各国の建築を模倣せんと勉めてゐるが、私の目には未だ一ツとして寺院の屋根を仰ぐが如き雄大なる美観を起させたものはない。新時代の建築に対する吾々の失望は単に建築其のもののみならず、建築と周囲の風景樹木等の不調和である。現代人の好んで用ゆる赤煉瓦の色と、松の葉の濃く強い緑色と、光線の烈しい日本固有の藍色の空とは何たる永遠の不調和であらう。日本の自然は尽く強い色を持つてゐる。此れにペンキ塗や赤煉瓦を対峙せしめるのは余りに無謀と云はねばならぬ。然るに寺院の屋根と廂と廻廊とを見よ、日本寺院の建築は、山に河に村に都に、いかなる処に於いても、必ず其の周囲の風景と樹木と、また空の色とに調和して、こゝに特色ある日本固有の風景美を組織してゐる。

この荷風の建築及び風景美についての議論について、的を射たものかどうかについては、とりあえず触れないことにしよう。問題の焦点は、彼がこのような議論をもってただ赤煉瓦に代表される風景の西洋化を否定していたのか、という点にある。

荷風がヨーロッパの建築物を無条件に排斥しているのではないことは、この散策記に、パリを初めとするヨーロッパの都市の風景が、比較対象として多く登場することからも窺える。むしろ荷風は、西洋の風景の讚美者である。「第十 坂」の例を挙げよう。平坦な街路より、坂を好むという文脈の中の言葉である。

西洋に於ても寧ろ私は紐育のFifth Avenueよりもコロンビヤの高台に上る石級を好み、巴里の大通よりも遙にモンマルトルの高台を愛した。里昂にあつてはクロワルツスの坂道より、手摺れた古い石の欄干を越えて眼下にソオンの河岸通を見下しながら歩いた夏の黄昏をば今だに忘れ得ない。あの景色を思浮べる度々、私は仏蘭西の都会は何処へ行つてもどうしてあのやうに美しいのであらう。どうしてあのやうに軟く人の空想を刺戟するやうに出来てゐるのであらうと、相も変わらず遺瀨なき追憶の夢にのみ打沈められるのである。

ここにも見られるように、荷風は西洋の石の文化自体を否定しているのではない。それが東京という街に調和しているかどうかが問題なのである。先に見た「第五 寺」には、「日本の神社と寺院とは其の建築と地勢と樹木との寔に複雑なる綜合美術である」との言葉も見える。

しかしながら、荷風の議論には、更に一段進んだ大切な点がある。「第五 寺」の章は、次のような言葉で締め括られる。

思はず畠違ひへ例の口癖とは云ひながら愚痴が廻り過ぎた。世の中はどうでも勝手に棕櫚箒。私は自分勝手に唯一人日和下駄を曳きずりながら黙つて裏町を歩いてゐればよかつたのだ。議論はよさう。皆様がお退屈だから。

むしろこの態度こそ、荷風の議論を考える上で無視しては通れないものと考えられるのである。

3. 散策記が文学になる時

「第一 日和下駄」の章には、「今日東京市中の散歩は私の身に取つては生れてから今日に至る過去の生涯に対する追憶の道を辿るに外ならない。之に加ふるに昔ながらの名所古蹟を日毎年毎に破却して行く時勢の変遷は、更に市中の散歩をして悲哀無情の寂しい詩趣を帯びさせる。およそ近世の文学に現はれた荒廢の詩情を味はうと欲すれば埃及伊太利に赴かずとも手近の東京を歩むほど、無惨にも痛ましい思をさせる処はあるまい」と書かれている。ここに、この散策という

行為と、文学との近接性は明らかであろう。同じ章には、「江戸の人が最も盛に江戸名所を訪ね歩いたのは私の見る処矢張狂歌全盛の天明以後であつたらしい。江戸名所に興味を持つには是非とも江戸軽文学の素養がなくてはならぬ」とも書かれている。

しかしながらこれは、江戸期の軽文学を通して見れば、散策もまた文学的になるというような表面的な次元で受け取るべきではなさそうである。

注目すべきは、「昔ながらの名所古蹟を日毎年毎に破却して行く時勢の変遷は、更に市中の散歩をして悲哀無情の寂しい詩趣を帯びさせる」という視線である。詩趣、すなわち文学性は、この名所古蹟を破壊している時勢の変遷にこそ認められるという、実に皮肉で、実に逆説的な論理がそこに生じてくるのである。

散策記が文学になる時、それは、散策して得た都市への視線と、それを論じる議論と思索とが、都市計画の実現性から離れた時である。例えば幸田露伴は、先に見た「一国の首都」の中で、当時の市区改正の案にあるとおり、各所に公園を作るべきとした上で、「公園内の遊戯逍遙の如き健康平和の因をなすに足るべき習慣を与へんことは、道徳上よりするも衛生上よりするも経済上よりするも、万利あつて一害なきの企図なりとす」、「けだし我が都人士は古來適当なる公園を有したる歴史を有せざるためと、運動歩行に不便なる衣服を着け居るためとの故にや、甚しく戸内に蟄伏することを悦ぶ習慣ありて、(略)挙動も活潑にして体軀も自ら好良なる欧米人の戸外の逍遙を好むに比して甚だ愧づべきこと」と述べている。しかしこのような議論と荷風の議論とは根本的に異なっている。荷風の議論は、散策を通じた、江戸回帰型の都市改良の議論に見えるが、実は改良自体を求めていない。つまり実行者の言ではない。荷風の文章を読むジレンマが此処にはある。その議論の中味が理解されても、それを現実に照合する限り、そこに文学性はない。むしろそれらが現実から遠ざかる時、文学がそこに顔を出すのである。およそ文学とは、そのような現実性や実用性とは根本的に相容れないものなのである。荷風の文章はそれを見越して、実現不可能な、そして非現実的な東京観を敢えて示すものと考えられるのである。

荷風は、『日和下駄』の「第四 地図」において、以下のような実に相対的な視線を、東京に対して投げかけている。

西洋文学から得た輸入思想を便りにして、例へば銀座の角のライオンを以て直に巴里のカツプエーに擬し帝国劇場を以てオペラになぞらへるなど、無暗矢鱈に東京中を西洋風に空想するのも、或人には或は有益にして興味ある方法かも知れぬ。然し現代日本の西洋式偽文明が森永の西洋菓子の如く女優のダンスの如く無味拙悪なるものと感じられる輩に対しては、東京なる都会の興味はどうしても勢尚古的退歩的たらねばならなくなる。吾々は市ヶ谷外濠の埋立工事を見て、いかにするとも将来の新美観を予知することの出来ない限り、愛惜の情は自ら人をしてこの堀に藕花咲匂うた昔を思はしめる。

要するに、荷風の視線は、東京の工事中なる現状に絶望する分、致し方なく、江戸という過去を目指すだけであり、必ずしもそれが唯一の答ではないのである。前掲の藤森照信『明治の東京計画』によると、明治39年、すなわち1906年に、外債の発行と東京市臨時市区改正局設置によって、新設計の市区改正案の速成が決められている。藤森は次のように書いている。

市中いたるところ市区改正の槌音の聞こえぬ日はなく、三年半を経て、明治四三年、おおよそ仕上がった。さらに、切れ切れにし残した二六カ所の工事に三年と一〇〇〇万円を注ぎ、ついに、大正三年、新設計は実現した。

この工事のさなかの明治41年、すなわち1908年に荷風はパリから帰国したことは先にも述べた。また森鷗外が、荷風の主宰する『三田文学』に、日本が西洋化の正しく最中であることを直截述べた「普請中」を発表したのが明治43(1910)年6月である。そして大正3(1914)年は、『日和下駄』の連載が始まった年である。この東京の市区改正運動の仕上げの時期に、帰朝後の荷風はいきなり遭遇したのである。

したがって、荷風にとって散策は、江戸軽文学を便りに江戸の面影を追うためというより、いかにそれが今日の前で、壊されていくかを確認する作業であったともいえる。この虚しさを、直接的に、誰かに抗議するのではなく、そもそも同様に、文字だけで形成される非物質的で非現実的なジャンルであるところの文学

という器に、これを盛っただけのことなのである。壊されていくことに抵抗も出来ない、実に虚しいものであるが故に、それは、文学となりうるのである。

そこには当然ながら、露伴のような市区改正をめぐる読者の自覚への働きかけもない。そんなものは読者にとっては、先に見たとおり、「お退屈」なもの以外の何物でもないからである。文学をそんな実用的な働きをするものとは考えないのである。

散策自体もまた、江戸追慕のために行うものでもない。ましてや、健康増進のために行うような行為では決してない。そこには最初から、無駄で無用であることが折り込み済みである。そしてそのような営為が言説化された際には、その無用性の裏打ちを伴うことを条件として、散策の営為と文章とが文学になるわけである。

おわりに

田山花袋は『東京の三十年』(博文館、1917年)の中に収めた、「東京の発展」という文章に次のように記している。

市区改正は既に完成され、大通の路はひろく拡げられ、電車は到るところに、その唸るやうな電線の音を漲らせた。(略)

でも、下町、ことに、日本橋の奥の方に行くと、今でも江戸の町の空気が残つてゐるところがないでもない。(略)

それから下谷の竹町、御徒町の裏通りにも、こんなところがあるかと思はれるやうな、二、三十年以上も時勢に後れた街の光景を見ることがある。そこには、江戸時代と言ふよりも、寧ろ明治十五六年代の街の縮図を私に思はせる。(略)

かうして時は移つて行く。あらゆる人物も、あらゆる事業も、あらゆる悲劇も、すべてその中へと一つ一つ永久に消えて行つて了ふのである。そして新しい時代と新しい人間とが、同じ地上を自分一人の生活のやうな顔をして歩いて行くのである。五十年後は？ 百年後は？

これが花袋の東京の現状に対する見方である。ここにはまだ将来への視線がある。荷風の視線は、一見過

去に向かうように見えて、実は、今、現在しか見ていない。もちろん、将来もまた、さほど重要ではない。亡びることが前提である現在がそこに措定される時、荷風の文学は一瞬その顔を見せる。過去のことであろうと、未来のことであろうと、今、文学としてここに書き付ける、その時間だけが、荷風にとって重要だったのである。